

東 海 の 古 代

第232号 2019年12月

会長 : 竹内 強

編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp

HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

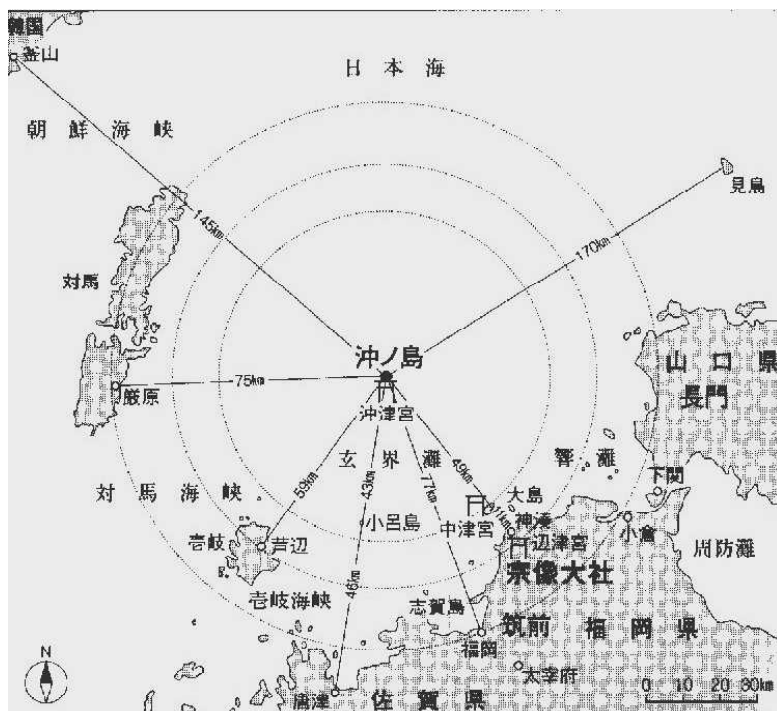
沖ノ島と海洋交易

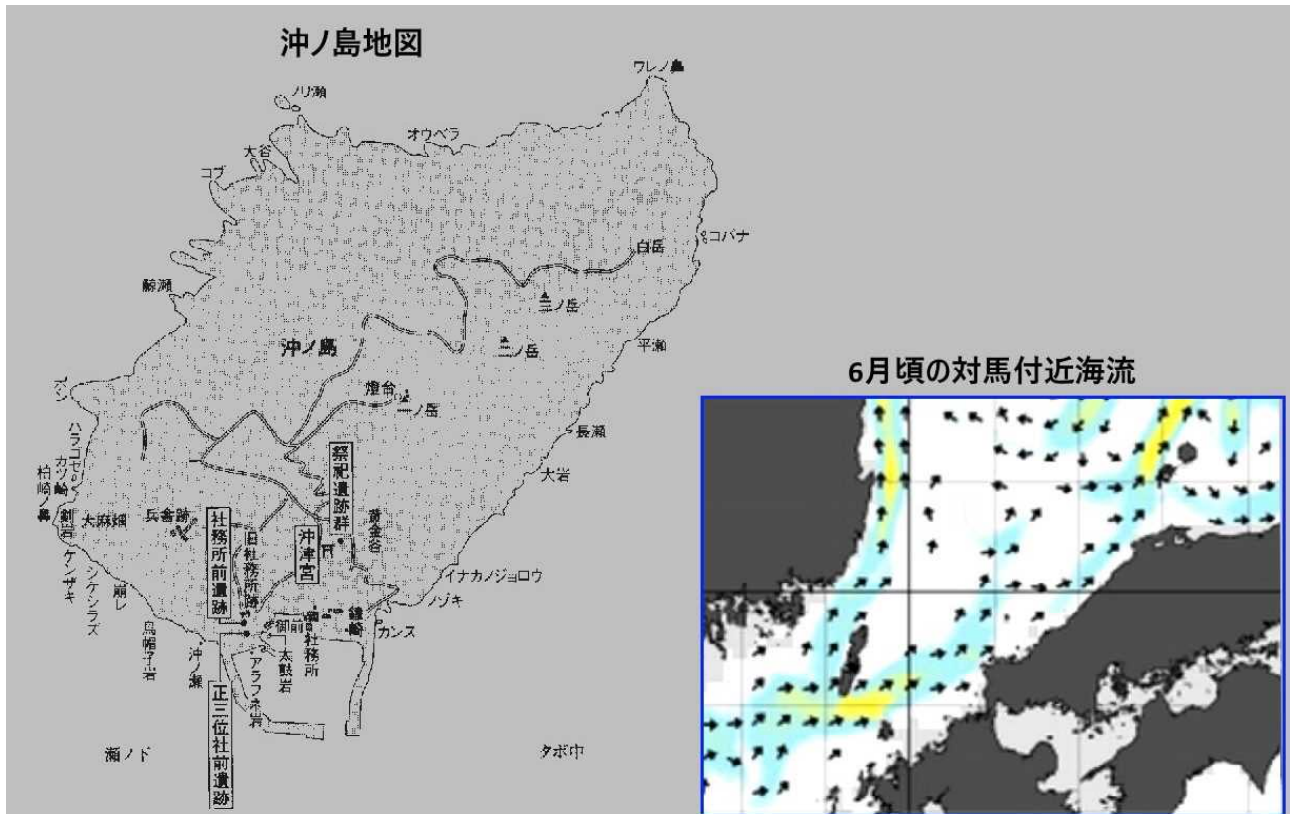
一宮市 畑田寿一

4世紀後半に入ると沖ノ島での祭祀が盛んになる。現在の通説ではその規模の大きさからヤマト王権が主催したと考えられているが、4世紀初頭の崇神天皇代にヤマト王権が成立したとする説と組み合わせると半世紀程で西日本まで勢力を拡大したことになり説得性に欠ける。沖ノ島から出土する土器の大半は北九州と瀬戸内海西部のものであり、4世紀には北九州を中心とした九州王権と瀬戸内海西部の半独立した勢力とが交易の中心人物であったと考えるべきである。

今回はこれらの勢力がどの様に朝鮮半島と交易を行っていたかを中心に眺めてみたい。

なお、参考文献は①『沖ノ島調査報告書』(宗像大社復興期成会、1958年)、②「宗像・沖ノ島関連遺跡群」研究報告書(世界遺産推進会議)(Ⅰ～Ⅲ)、③『宗像大社・古代祭祀の原風景』(正木晃、NHKB00KS、2017年)、④『日本の船を復元する』(石井謙治、学習研究社、2002年)などである。





1 縄文時代の沖ノ島

(1) 縄文遺跡

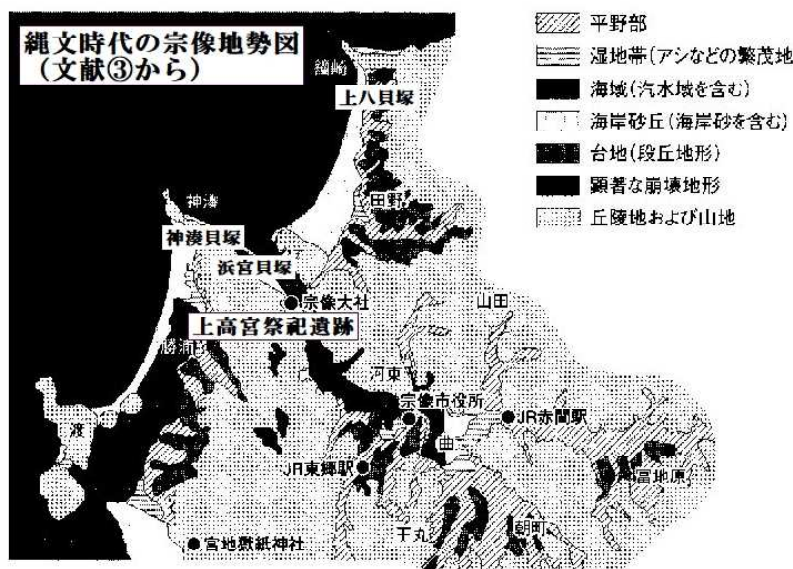
あまり知られていないが沖ノ島には縄文遺跡がある。場所は島の西側の「大麻畑遺跡」や南側の「社務所前遺跡」で、縄文中期（BC4000年～BC3000年）ごろとされており、出土している土器から遠賀川を中心とした九州北部、瀬戸内海西部からやって来たと考えられている。渡航の目的はニホンアシカの猟で大量の骨が出土している。

対岸の宗像地域とは約50Km離れており、縄文時代に既に波の荒い玄界灘の海流を横から受けながら渡航できたことを物語っている。

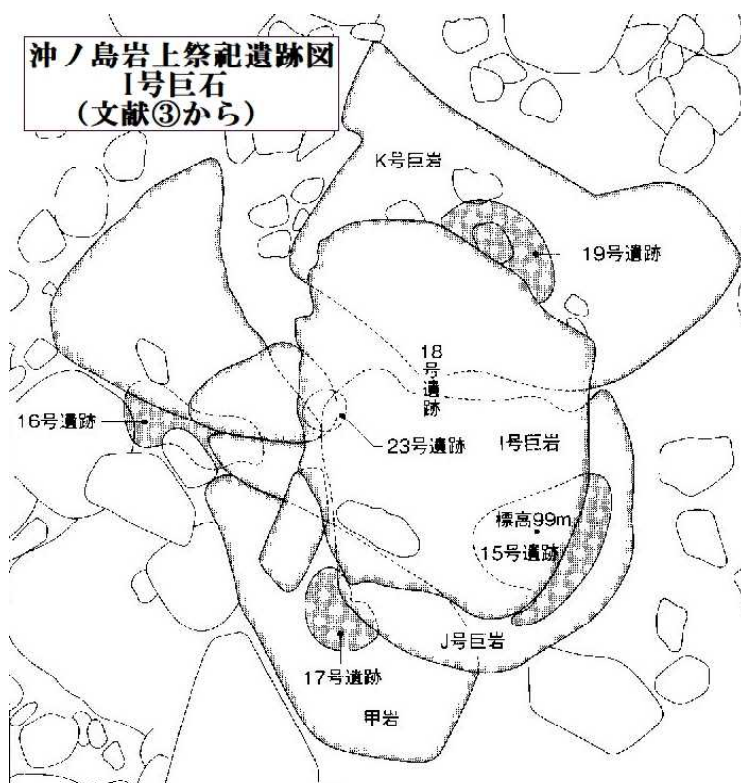
どのような方法で渡航したかは謎であるが、ニホンアシカの繁殖期である5、6月は波も比較的穏やかで海流も0.5ノット（時速1Km）程度であり、後述の表層流をうまく利用すれば可能であった。国内で外洋用と目される刳木船は例が少ないが、京都府舞鶴市の浦入遺跡（BC6000年）から全長8m、幅0.8m、船底の厚みを5cmまで削り込んだ横幅の広い船が出土しており、この程度の船があれば復元力もあり渡航可能であった。

(2) 同時代の宗像地域

対岸の宗像地域では沿岸に貝塚が出土することや、中心を流れる釣川が現在の宗像市役所付近まで入江であったことから、古くから海人族が住み着いていた。志賀島を中心とした安曇族、糸島半島の久米族と同じようにムナカタ族が存在していたと考えられるが、その後の宗像氏との関係には諸説があり不明である。



2 沖ノ島での祭祀の目的



沖ノ島の祭祀は、4世紀中頃から600年に亘り行われてきた。その内、今回は岩上祭祀が行われてきた初期の段階（4世紀後半～5世紀前半）を中心に眺めてみると、代表的な17号遺跡からは石製模造品、銅鏡、碧玉製腕輪、滑石製祭具、武器などが出土している。銅鏡は「方格規矩鏡」や「内行花文鏡」が出土しており、この種の鏡は北九州（糸島市）から山陰（安来市）、京都市、高槻市などの他に新沢千塚古墳（樫原市）など広く分布して、九州地方とヤマト地方の交流を示している。以上の状況から通説では祭祀は「ヤマト王権が国家行事として執り行っていた」としているが、この時代にヤマト王権の勢力が九州全土に及んでいたとは考え難い。

祭祀の目的も「海の安全祈願・感謝」とし、古墳と同じ副葬品が出土するのは「祭・葬

の未分化」を理由としているが、巨石の先端を船の舳先に見立てた場合、これが全て本土を向いていることから、「遭難者の慰霊」の意味が濃かったと考えられる。この場合、「祭祀主願者は実際に航海をしていた海人族」となる。

3 沖ノ島を中継点とした海洋ネットワーク

(1) 韓国の竹幕祠祭祀遺跡

朝鮮半島の南西部にある竹幕祠祭祀遺跡^{ちくまくどうさいしせいせき}は、4世紀中頃から6世紀に亘り祭祀に使われた遺跡で、ここから出土する剣・有孔円板・刀子・短甲・鎌・鏡・勾玉などの石製模造品は日本各地で見られる出土品に酷似している。特に短甲は宗像大社の高宮祭祀場のものと同じと考えられており、両者が同じ交易ルートで繋がっていることを深く示唆している。

(2) 国内の寄港地

4世紀後半からは日本各地の寄港地に大規模な古墳が造られるようになり、国内の海洋ルートが整備されたことを物語っている。

日本海側では中小河川の河口に砂洲ができた潟湖を寄港地としたルートが拓け、丹後半島には地元の皆さんが提唱する「丹後王国」が誕生して100mを超える古墳が造られるようになった。

太平洋側は瀬戸内海ルートが整備され、紀州半島を廻った伊勢湾には宝塚古墳(松阪市)に巨大な船の埴輪が登場する。太平洋ルートは更に東に延び、浜松、駿河方面まで伸びていった。

伊勢湾の玄関口にあたる神島の祭祀も盛んになり、八代神社の鏡の奉納品は64面を数える。神島の祭祀の目的については諸説あるが、沖ノ島と同様に航海の安全を願ったと思われる。

4 4世紀の外洋船

現在、国内で発見されている船は刳木船の周囲に板囲いを取り付けた準構造船で、鈍重で重心が高いため波の荒い外洋では使用が困難である。これは今までの実験で証明されているが、他に出土事例が無いため、通説では依然として刳木船や準構造船での渡航を前提に各種の説明がされている。

(1) 帆船の存在の可能性

中国では湖北省江陵鳳凰山遺跡(前漢時代)から板組の船の模型が出土しており、既にこの時代に中国は刳木船の時代では無かった。国内では岐阜県の荒尾南遺跡(弥生時代中期)から80本のオールを持つ大型船と帆掛け船の描かれた土器が出土している。その他にも帆船の絵が描かれたものが多数出土しているが、いずれも線画であり、詳細を知る資料にはなり得ない。

一方、『日本書紀』における馬と帆船の記述を集めると次のようになる。

天皇年代	西暦	出来事
垂仁32年7月	4 C前半	野見宿弥が殉死の代りに埴輪で馬を作るよう提案
景行40年10月	4 C前半	信濃で日本武尊が乗っていた馬が動かなくなった
仲哀9年10月	4 C末	三韓征伐の際、新羅王が馬梳と馬鞭を献上
		朝鮮半島に進攻の際、帆行により船を進めた
応神15年8月	5 C初	百濟王が阿直岐を遣わして馬2匹を献上

この時代の記述が何処まで信用できるか疑問であるが、4世紀には馬が居た可能性は高

い。馬を朝鮮半島から運ぶには手漕ぎの船では不可能であるので同じ時期に帆船が存在した。

ヨーロッパでは船底に竜骨（キール）を持つ船がローマ時代から存在し、その技術は東南アジアまでは確実に伝わっているが、なぜか中国に伝わった形跡が無い。中国では船底が浅く、両端に浮き用気密室を持つジャンク船が発達し、これを外洋船にも使っていた。ただし、帆については竹を挟み込んだ縦帆が早くから発達し、風向い方向にも高速で走行できる構造をしていたと考えられる。恐らく4世紀には同種の帆船が朝鮮半島との往来に使われていた。これを前提にしないと朝鮮半島から140Km離れた沖ノ島を中継点とする交易ルートは説明が不可能であろう。

（２） 対馬表層流

対馬付近を流れる対馬海流は平均1ノット（時速1.8Km）で、太平洋を流れる黒潮に比べれば3分の1程度であるが、手漕ぎの場合は大きな負担になる。

朝鮮半島、対馬、壱岐の間は各々約50Kmあり、2ノット（時速3.6Km）で横方向からの海流を受けて渡ろうとすると10時間以上掛かることになり、手漕ぎでの限界とされてきた。

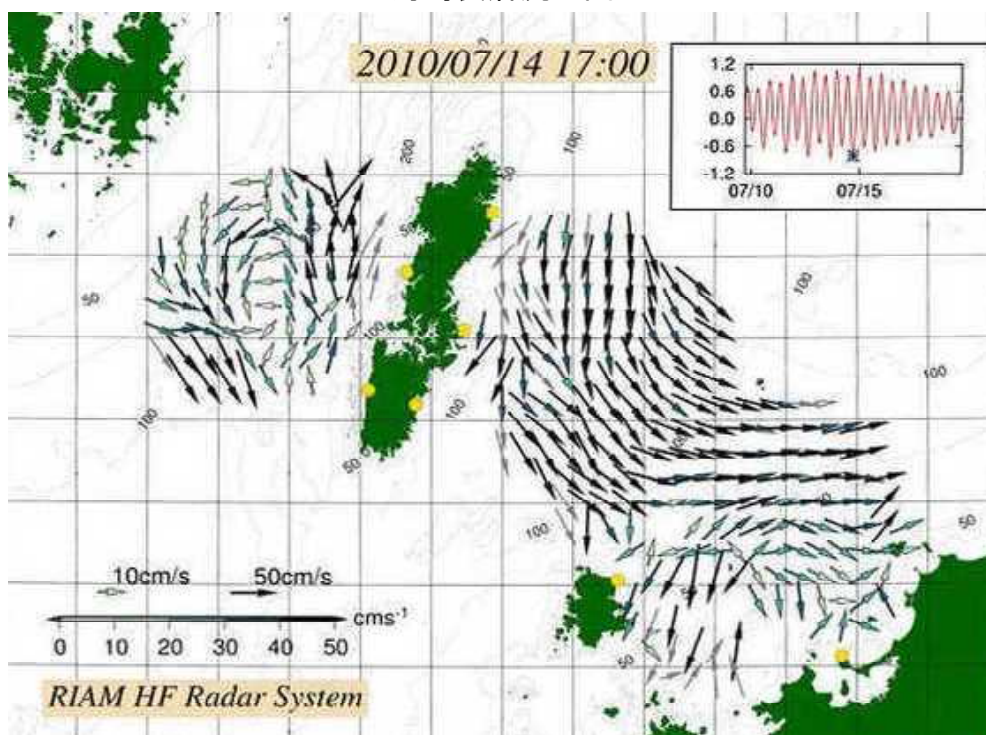
しかし、日本海は形状が大きな池で海水の出入口は対馬海峡、津軽海峡、宗谷海峡に限られる。このため海峡付近では潮の干満により表層海流が海流本体と別な動きをすると考えられてきたが実態は不明であった。

近年、九州大学応用力学研究所では海洋レーダーを使って対馬海峡表層流監視を2002年から続けてきた結果、次のようなことが判明した。

- ① 対馬の東側では海流の停止、逆行が発生する。
- ② 対馬の西側では上記に加えて渦巻状の海流が発生する。
- ③ 上記の状態は1日2回起り、数時間継続する。

古代人は海流の動きを熟知しており、以上のような現象をうまく利用して渡航していたと考えられる。

対馬表層流の図



5 まとめ

(1) 海洋交易における沖ノ島の位置づけ

5世紀の朝鮮半島との交易ルートは、①有明海からのルート、②唐津・博多からのルート、③沖ノ島からのルートが存在した。そのうち③は主に日本海沿岸各地や大和へのルートと結び付いており、海洋交易を盛んに行った河内王朝の繁栄の源になっていたと考えられる。

朝鮮半島への渡航は風や海流などの関係から往路の方が難しく、①や②が主に使われていたと思われる。一方、③のルートは帆船を前提にすれば最短ルートとなり帰路での利用は十分考えられる。

しかし、対馬海流の潮の流れは複雑で、潮目にうまく乗れば比較的容易に渡れたが、間違えると日本海に持っていかれ、それは死を意味していた。潮目や天候を読む力は発達したが、最後は神頼みであり、祈りと占いは欠かせなかった。これが沖ノ島での祭祀に結びついていたと考えられる。

(2) 北部九州勢力とヤマト

5世紀後半になると沖ノ島では岩上祭祀から岩陰祭祀に変わり、出土品も朝鮮半島やシルクロード経由の品が増えてくる。この時代は仁徳天皇～雄略天皇の時代で河内王朝の全盛期にあたる。息長氏を始めとする新興勢力が海洋交易により膨大な利益を河内にもたらしていた。この変化は宗像地方での古墳にも表われている。

① 東郷高塚古墳（宗像市）

宗像大社が存在する釣川の上流に位置し、宗像氏が勢力を拡大する4世紀後半の首長の墓とされている。古墳からの出土品は他の古墳を変わず、宗像氏は沖ノ島における祭祀を担当する一方で従来からの方法で埋葬を行っていたことになる。4世紀の古墳は他に無く、5世紀になると海岸近くの津屋崎古墳群が造られるが、この古墳からの出土品は沖ノ島の遺品と共通するものが多い。

このことから宗像氏はヤマトに台頭する新しい勢力との結びつきを深めていった。

② 正三位社前遺跡

沖ノ島と本土との中間の大島にある正三位社前遺跡からは鉄素材の鉄廷が9枚出土している。おそらく朝鮮半島からの無事な渡航を感謝して奉納されたものであろう。沖ノ島からの出土品にも同様の傾向が見られ、渡航後の感謝祭に重点がおかれたのではないかと。また、この時代は鉄の相当分は輸入に頼っており、主要な交易品であったことが伺われる。

以上、沖ノ島を中心に縄文時代からの渡航方法を眺めてきた。いずれの区間も約50Km離れており手漕ぎでは限界に近い。この中で4世紀には朝鮮半島南西部まで倭人は進出を果たしており、渡航は頻繁に行われていた。

渡航の手段である船については、腐りやすい板張り船が出土しないため「証拠第一主義」から未だ刳木船や準構造船の発想から抜けきれないでいるが、外洋で物を運ぶためには東南アジアのジャンク船を中心とした帆船や足の速い小型の板張り船などに眼を向けるべきであろう。キーテクノロジーは船板をつなぐ技術で、ヨーロッパではローマ時代に既に使われていた。この技術が東に伝たわら無かったとは考えられない。視点を変えた今後の研究に期待したい。

大宰府と山城・水城

名古屋市

石田泉城

1 山城や水城の築城時期

今年の夏、大野城址の百間石垣を訪れました。百間石垣は、延長180mで現存する大野城址の中で最長の石垣です。

<百間石垣>



倭は、663年に百済を救援するため朝鮮半島へ出兵しましたが、白村江の戦いにおいて唐・新羅連合軍に敗れてしまいます。この結果を受けて倭は初めて連合軍による倭への侵攻を想定したとされ、大野城などの防衛施設を築造したと考えられています。

現地に建てられた大野城跡の説明書きには、次のようにあります。

<現地にある説明書き>

大野城

大野城は白村江の戦（663）の後、唐・新羅からの侵攻に備えて西日本各地に築かれた山城の一つで、北西の水城、南方の基肄城とともに大宰府政庁を中心とした防衛ラインを形成していました。（以下略）

大野城

大野城は白村江の戦（663）の後、唐・新羅からの侵攻に備えて西日本各地に築かれた山城の一つで、北西の水城、南方の基肄城とともに大宰府政庁を中心とした防衛ラインを形成していました。この山城は百済の亡命高官2名による戦略的・技術的指導のもと築城されたことが『日本書紀』に記されることから、一般に朝鮮式山城と呼ばれています。大野城は政庁の北に聳える四王寺山中（標高約409m）にあり、北は博多湾から南は筑後方面を眼下に納める絶好の場所に立地し、山頂と山腹に土塁が、谷間には石垣が構築されています。現在、確認されている城内への入口は5ヶ所あり、食料の備蓄や居住に利用されたと考えられる70棟余りの建物が丘陵を造成した平坦面に残されています。

この説明書きで気になるのが白村江の戦い（663年）の後に大野城が築かれたという点です。

確かに『日本書紀』には、次のとおり、天智四年（665年）に大野城を築いたと記されています。

（四年秋八月）遣達率憶禮福留・達率四比福夫、於筑紫國築大野及椽二城。

天智四年八月に百済の達率である憶禮福留（おくらいふくる）・四比福夫（しひふくふ）を遣わし、筑紫国に大野城と椽城（基肆城）を築く。（読み下しは泉城による。以下同じ。）

ただし、この白村江の戦いの後に造られたのは、大野城の城だけではありません。大野城築城の一年前（664年）には水城を造ったとあります。

（三年）是歲、於對馬嶋・壹岐嶋・筑紫國等置防與烽。又於筑紫築大堤貯水、名曰水城。

（天智三年）この歳、對馬嶋、壹岐嶋、筑紫國等に防（さきもり）と烽（とぶひ）とを置く。また筑紫、大堤を築きて水を貯える。名づけて水城と曰う。

これらの『日本書紀』の記事に従えば、大野城等の山城も水城も、白村江の戦い（663年）の後に築かれ、防人を配置し烽火台が設けられたということになります。しかし最新の科学的な年代測定の結果によれば、白村江の戦いの後とは言い切れません。

実は、この「水城」について、九州歴史資料館が平成13・14年度に御笠川周辺の水城において、放射性炭素による年代測定を実施したところ、最も古い年代は、下層の240年±で、その次が中層の430年±、続いて上層の660年±であったとのことです。「水城」の土塁の下部は厚い砂質や粘質土で築かれ、内濠から取水して外濠へ吐水する「導水管」の機能を持つ木樋が設置されています。この「導水管」の木樋についても、7世紀後半と考えられていましたが、九州大学工学部冶金学科の坂田武彦助手が行なった放射性炭素による年代測定結果によれば430年とされ、九州歴史資料館が行った中層の年代と合致しています。

（参照：古田史学会報63号「理化学年代と九州の遺跡」内倉武久、うっちゃん先生の「古代史はおもしろいで」、<https://ameblo.jp/kodaishi-omoroide/entry-12243854367.html>）

この水城の年代測定結果について、私は、「太宰府史跡発掘調査報告書Ⅱ」（九州歴史資料館、2003年）の中の「9 水城跡第35次調査（出土粗朶 年代測定）」（パリノ・サーヴェイ株式会社）による調査報告書で確認しています。

次のとおりです。

区 分	樹 種	年 代	補正年代	中央値（誤差範囲）
1 上層の粗朶	コナ属アカシ亜属	1420±110BP	1380±110BP	AD660 (AD600～770)
2 中層の粗朶	ヒサカキ	1700±100BP	1600±100BP	AD430 (AD345～595)
3 下層の粗朶	ヒサカキ	1850±110BP	1800±100BP	AD240 (AD 85～380)

注．β線計測法。1950年が基点。放射性炭素の半減期は5570年を使用。

この調査がされた第35次調査区において、粗朶は、10～20 c mの厚さの粘土と交互に11層になっています。1は上層にある5層のうち上から4番目の粗朶、2は中層にある3層

のうち3番目の粗朶、3は下層にある3層のうち1番目の粗朶です。このほかの層は報告書に示されていません。

粗朶層の時期の考察では次のとおり記されています。

記録では、水城が構築されたのがAD664である。GL-2.0mの歴年代は、構築年代とほぼ一致する。このことから、最上位の粗朶層が水城構築とほぼ同時期であることが推定される。土累の直下から検出されていることを考慮すると、水城構築直前に使用された可能性がある。一方、坪掘1中層第2層（泉城注．中層のこと）と坪掘2第2層（泉城注．下層のこと）は、水城構築年代よりも300～400年程古い年代を示している。このことから、水城構築以前の300年～400年間に粗朶層が作られていたことが推定される。しかし、各1点の測定であるため、今後さらに各層の年代に関する資料を増やし、相互に比較を行うことで、各層の年代を検討したい。（142頁）

考察は、上層の粗朶層は『日本書紀』の記述にある水城構築年代と同時期であるとする一方で、中層、下層の年代に関しては、試料が1点で少ないので今後の検討として逃げています。しかし、その後に調査を追加して測定が為されたとは聞いていません。

現時点では上層も試料が1点ですから、上層の年代測定結果と同程度に中層、下層も確からしいということだと思います。

試料が11層あるうち3層のみで1層ごとに各1点とは、いかにも少ないです。なぜもっと始めから試料の数を増やして年代測定しなかったのだろうかと思ひます。『日本書紀』の記事に一致しない結果がいろいろと出てしまったのではないかと勘ぐってしまいます。なお、この下層のさらに下にもいくつかの粗朶層を伴う青灰色シルト層があり、水城の築造がもっと古い可能性を残しているようですが今後の分析を待ちたいと思ひます。

このように福岡県の公的機関である九州歴史資料館によって、科学的な年代測定により、白村江の戦い以前に水城が築造されていたことを示されたのは重要です。

ということは、白村江の後に築造された可能性よりも、白村江の前に築造され、そして240年±に作られた「水城」を基にして、その後430年±、660年±に補強された可能性が高いということです。私が主張したいのは測定結果に素直に従えば、白村江の戦いに臨む前に水城を造り備えたということです。

この「水城」に関する年代測定結果は、内倉武久氏が『太宰府は日本の首都だった』（ミネルヴァ書房、2000年）で声を大にされています。

水城と大野城などの築城が一带の施設であって、同じ時期に造られたとすれば、水城だけではなく、水城と関連する大野城・基肆城の山城も同じように3回にわたり築城・補強された可能性を生じます。

『日本書紀』は、白村江の戦い以前には大野城なども水城もなかったかのような記述ですが、実はもともとあった山城や水城を増強したと考えたほうが適切ではないかと思ひます。

したがって、この説明書きでは物足りない気がするのです。

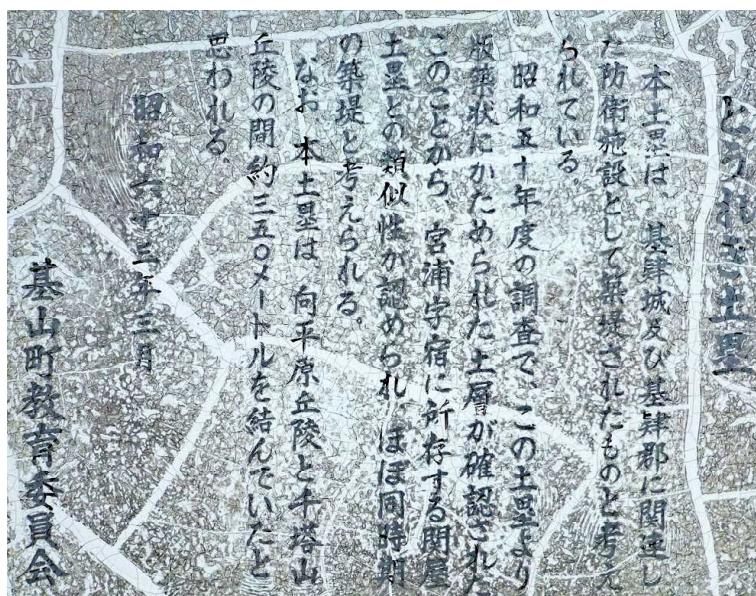
ところで、「水城」の測定結果に対する九州歴史資料館の公式見解については、先に参考にした内倉氏の論考やブログに記されていますが、あらためて紹介しますと、「書紀の記載の正しさが証明された。水城は六六四年前後にはじめて築造されたことがわかった。古い測定データは水城とは関係がない」とされます。書記の記載の照明とは思えません。

また、「大野城」に関する九州国立博物館の見解は、大野城の太宰府口城門の発掘調査の結果、築造当初の掘立柱の柱穴からヒノキの柱根が検出され、年輪年代法による分析の結果、西暦628+α年という結果が出ており、『日本書紀』の記述に合致するとされます。

ただ、これは大野城の中の1カ所の城門に残っていた柱について語るものであって、それ以前の遺物のものではありません。例えば、出雲大社の柱についても現存していた柱は13世紀のものであってそれ以前の奈良時代にあったはずの柱は発見されていません。したがって、大野城の城門の検査結果は、現存していたヒノキの柱根が7世紀のものであったということがわかるのみで、これを持って『日本書紀』の記述と合致するというのは拙速ではないでしょうか。何を持って築造当初の掘立柱とするのかも明確にされていません。また、628+ α 年の測定結果は、白村江の戦い（663年）以前の可能性も示していますから『日本書紀』の記述年（665年）と合致するという九州国立博物館の見解は適切ではありません。さらに、水城と大野城の関係をどう説明するのかでしょう。

なお、基山町教育委員会では、基肄城ととうれぎ土塁・関屋土塁の施設は、関連する防衛施設として一体のもので、同時期の築造と考えられており、現地の説明書きには次のとおりあります。

＜とうれぎ土塁の説明書き＞



基山町教育委員会も基肄城と土塁は、関連する防衛施設と考えています。

大野城の説明書きの「**大宰府政庁を中心とした防衛ライン**」は、あくまでも大和朝廷のための防衛を念頭に置いた説明です。九州歴史資料館も九州国立博物館も、大宰府は大和朝廷の出先機関であるという立場を崩していないので、このような公式見解に即した説明になるのでしょうか、『日本書紀』でさえ、大野城・基肄城と水城が白村江の戦いに関連して記されており、一体の施設ですから、その築造も同時期に行われたと考えるのは不思議ではないでしょう。

とすれば、科学的な調査結果を踏まえれば、水城のみでなく大野城などの山城の築造は同時期であり、それらは白村江の戦い以前に造られていたと考えたほうが自然です。

白村江の戦いで敗れたために、あわてて山城や水城を築いたという『日本書紀』の記述には無理があります。これほどの防衛施設を造るためには事前の準備が必要で材料となる木材の調達や乾燥に限っても数年を要するものと思います。

奈良時代の山城ではありますが、怡土城を例にすれば天平勝宝八年（756年）から神護景雲二年（768年）にかけて築城されています。造り始めてから13年かかっていますので、大野城だけでなく水城を造るには10年以上かかると考えられます。

白村江の戦いの有無に関わらず、軍事的な戦略として、常に外部的脅威に対して防衛施設を造り備えるのは当然のことです。

たとえば、朝鮮半島の状況を見ると、高句麗では、古くからの重要拠点である集安を王都として国内城とともに背後の山には緊急用の大規模な山城（丸都城）を築いて対外的脅威に備えていました。3世紀には魏に何度か侵攻され落城しています。また、6世紀には倭國の朝鮮半島の領地であった任那が新羅によって滅ぼされていますから、朝鮮半島における戦乱の状況や日本列島へ侵略が及ぶ危険性について、倭國は少なくとも3世紀からずっと十分に承知していたはずで

こうした状況を考えれば、白村江で大敗してから防衛施設を1～2年で築くなどという『日本書紀』の記述やそれを信用する専門家の認識は、非現実的であると思えません。

私は、水城の年代測定の結果如何に関わらず、白村江の戦いの前に倭國が防衛を固めもしないで戦いに臨んだという『日本書紀』の記述に首を傾げます。

2 山城や水城が守る対象

山城や水城は大和朝廷を守るための防衛施設ではなかったことは、すでに古田武彦説にあります。『ここに古代王朝ありき』（ミネルバ書房、2010年、333頁）では、むしろ大和朝廷から守る施設でもあったと示唆されています。

ここでは再度、防衛施設の目的を記します。

<防衛施設の配置図>



通説では、「大宰府」は、大和朝廷の地方統治上で必要な要衝に設けられた地方統治機関とされ、その役割は、地方の国々を監視し統治することにあったとされます。

『日本書紀』の記述に従えば、白村江の戦いで敗戦したために、大和朝廷は、敗戦の翌年から大野城などの山城や水城を築いたとされますので、7世紀後半に大野城や水城がつくられたと考えられています。既に示したとおりです。

しかし、『日本書紀』の7世紀に関する記述については、大和朝廷が紀元前から日本列島を支配していたという編纂者の思惑がずいぶん強く影響していると考えられ、そのまま素直に理解するのは危険です。

通説とは違って、山城や水城は大和朝廷を囲むのではなく、太宰府を囲んでいます。7世紀以前の「大宰府政庁」について、大和朝廷の出張所であったという認識は誤っているようです。大野城などの山城や水城などの防衛施設は、配置図をみれば一目瞭然、太宰府を守るための防衛施設と考えるべきでしょう。

(2) 前畑遺跡の土塁

＜現地説明会資料＞

平成28年 12月3日(土曜日)・4日(日曜日)

新発見 大宰府を守る土塁

前畑遺跡第13次発掘調査 現地説明会

筑紫野市教育委員会 文化情報発信課

1. 発見された土塁（どるい）

筑紫駅西口土地区画整理事業に伴い実施している前畑遺跡の発掘調査では、弥生時代前期～中期の集落、古墳時代後期の集落と古墳、窯跡、中世の館跡、近世墓地などが発見され、長期間にわたって人々の営みの痕跡が発見されています。

今回の丘陵部での調査では、7世紀に造られたと考えられる長さ500メートル規模の土塁が、尾根線上で発見されました。

2. 土塁の構造

土塁は大きく上下2層から成り、上層の外に土壌を被せた構造です。上層は種類の異なる土を層状に積み重ねた「版築」（はんちく）と呼ばれる工法で造られています。このような工法は特別史跡の水城跡（みづきあと）や大野城跡（おおのじょうあと）の土塁の土壌にも類似しており、7世紀後半に相次いで築造された古代遺跡に共通した要素と言えます。

ただ、すでに知られている水城や小水城、とうれぎ土塁、関屋（せきや）土塁といった7世紀の土塁は、丘陵と丘陵の間の谷を繋ぎ、敵の侵入を遮断する目的で作られた城壁としての機能が想定されています。

今回、前畑遺跡で発見された土塁は、宝満川から特別史跡基肆城跡（きいじょうあと）に至るライン上に構築されたもので、丘陵尾根上に長く緩やかに構築された、中国の万里の長城のような土塁となっています。

また、土塁の東側は切り立った斜面になっており、西側はテラス状の平坦面を形成しています。これは東側から攻めてくる敵を想定した構造で、守るべき場所、つまり大宰府を防御する意図を持って築かれたと考えられます。

新たに発見された前畑遺跡の土塁跡は興味深いです。

太宰府の北側にある大水城や小水城、太宰府の南側にある、とうれぎ土塁、関屋（せきや）土塁のほかに、太宰府の東側では前畑遺跡の土塁が2016年に発見されました。

前畑遺跡の土塁は、東側が切り立った斜面で西側ははなだらかなことから、東側から攻めてくる敵を想定して築かれており、明らかに大宰府を囲む土塁であることが判明しました。

この前畑遺跡の土塁は、中国や朝鮮半島の国々からの攻撃だけではなく近畿側からの攻撃に対処するための防衛施設であることも想像されます。

このように大宰府を水城・土塁（全長約51k m）が囲むとなると、とても664年の1年間で造られるような施設ではないと思います。

また、これまで大水城や小水城などは「水城」と呼ばれてきましたが、この前畑遺跡は尾根上に築かれていることから、「水城」と呼ぶのは適切ではなさそうです。

大野城などと一体となった、古代の大規模な「大宰府羅城」である可能性が高まっています。今後の調査により、さらなる土塁の発見が期待されます。

<大宰府羅城推定図>（筑紫野市教育委員会資料）



黒実線はすでに発見されているもので破線は、推定線です。○で囲んだ赤実線は前畑遺跡で発見された部分であり、これまでに発見されたものと合わせて前畑遺跡における延長は770mほどと思われます。実線以外の赤い一点破線は、筑紫野市教育委員会などの推定によるものです。

いずれにしても大宰府を囲んでいる防衛施設であるとの認識です。

（２）大長年号が示すもの

興味深いことがあります。筑紫大宰府は701年の大宝律令の制定により国司制が敷かれたにもかかわらず、廃止されませんでした。

この筑紫大宰府だけが残された理由として諸説ありますが、外交・貿易・軍事上の重要な拠点であったことは間違いのないことでしょう。近畿天皇家一元史観の観点からは、この残された大宰府は、大宝律令以前から大和朝廷の直轄地であったとみなされます。

しかし、多元史観の立場では、7世紀まで倭國が九州を中心に本州や四国までも統治していたとし、8世紀には近畿の日本國が公式的にも実質的にも倭國にとってかわったとの認識です。これに関連した記事は『旧唐書』や『新唐書』にあります。『旧唐書』等には倭國と日本國は別の国として記され、後に日本國により統合されたと記されています。

とすると、それまで日本國は、倭國に従属する関係にあったこととなります。『二中歴』などに記されている古代逸年号の分布は、北海道や沖縄を除き日本列島の各地にあり、継体天皇以降は、倭國である九州王朝が、日本國である近畿王朝を含め各地の国々を属国として傘下に治めていたことを裏付けるようです。

さらに、『皇代記』『皇年代略記』『略年代記』によれば、大化のあとに続いて、「大長」の古代逸年号があるとされます。大長年号は、大宝律令制定以前にあったはずとする説がいくつかありますが、『皇代記』等の史料とともに、『二中歴』では大化年号は695年とされますから大化年号の後に大長年号があるとすれば、大宝律令制定後も大長年号が数年続いたと考えるのが合理的であり、大長年号の存在は、しばらく倭國の都の政庁が太宰府の地に残っていた可能性を示唆しています。

つまり、8世紀になっても、倭國と日本國の2つの王朝が数年間にわたり並列していた時期があるように思われます。

なお、林伸禧説では、大長年号は701年から709年まで続いたとします。

3 太宰府と大宰府

（１）太宰府の表記

古代日本における太宰府の表記は、「大宰府」であったと考えられています。『日本書紀』の推古十七年(609年)に「筑紫大宰」とありますので、『日本書紀』の記述を信用すれば「大宰」の職が7世紀初めにあったと思われます。また、天智十年(671年)には「筑紫大宰府」とありますので「大宰府」が設けられたのはこれ以前の時期と思われます。

ただ、不思議なことに、「大宰府」を設けたとか、「大宰」の職を設けたという肝心の記事はありません。

（２）三公の職階制度

晋（しん、265～420年）では、天子を補佐するために「**太宰・太傅・太保**」の三公の職階制度が設けられました。推測するに倭國では、推古十七年以前、7世紀よりもっとずっと前にこの三公の職階制度を真似て、「太」ではなく「大」を使用して「**大宰・大分・大保**」の職を設け倭國の王者を補佐したと私は思います。大宰府とは、この最高職にあった者がいた政庁であり、そのそばには大宰が仕えた倭國の天子（倭國王）の宮殿があったに違いありません。

なお、大宰は現在の太宰府市にあったことはご承知のとおりですが、大分（だいぶん）は、大宰府から東北へ10キロメートル強のところに福岡県飯塚市大分として地名が残っています。大分八幡宮の場所が大分の政庁地ではないかと思います。また、大保（だいほ）は、大宰府から南に10キロメートル強のところに小郡市大保として地名が残っています。御勢大霊石神社が大保の政庁ではないかと思います。

（３）卑彌呼の時代の政庁と宮殿

想像するに、卑彌呼の時代には、現在の太宰府と同じ位置に政庁が設けられ、その政庁には天子である卑彌呼を補佐する男弟がいました。その後には、晋の制度を取り入れて、倭國の天子を補佐する実務統括者として「大宰」の職が設けられ、その政庁を「大宰府」と名付けたと思われます。

都の人々が滅多に卑彌呼を見ることができなかったのは、卑彌呼の宮殿がその政庁以外にあったからであるはずで、とすれば、卑彌呼の宮殿があったと推測される最も可能性のあるのは大野城の場所であろうと思います。

「邪馬臺」は、「山」の「宮殿」を表します。福岡平野の中で「山」といえば大野城のある大城山（四王寺山）でしょう。水城が240±に造られたとすれば、同じ時期に卑彌呼の宮殿がその水城とともに大野城に造られたのではないかと思います。

4 唐に占領されなかった大宰府

（１）文献史学の視点では

『旧唐書』や『新唐書』には、唐に滅亡させられた高句麗や百済には、都護府や都督府が置かれて、それぞれ唐の軍人である左武衛將軍薛仁貴や右衛郎將王文度が派遣され唐の管理下に置かれたと記されています。唐が傘下にした他の国では必ず都護府や都督府を設け任命された唐人の名が記されています。

一方、『日本書紀』によれば、白村江の戦いのあとすぐに唐使劉徳高や郭務悰が二千人を伴い来訪したとの記事とともに、天智天皇六年（667年）に「筑紫都督府」の記事がありますので、白村江の戦いで敗れた倭國は、一時的にしろ唐により占領されたかのように記されています。『日本書紀』は、はっきりとは書きませんが、唐の占領統括本部が大宰府を都督府として、そこに置かれたことを想像させる書き方です。大多数の専門家は、大宰府が唐により占領されたことを当然のこととされます。

都督・評督は倭の制度であるとする古田武彦説については承知していますが、一方で、「都府楼跡」「都督府古址」の石碑があるのは『日本書紀』の記事に呼応し太宰府政庁跡に唐の機関である都督府があったことを指しているのかもしれませんが、いずれにしても、どちらの説も都督府が大宰府にあったことを前提としています。

ところが、『旧唐書』などの中国正史には、倭國に都護府や都督府が設けられたとの記事はありません。奇妙です。また、唐使である劉徳高や郭務悰の名も記されていません。占領した側は誇らかに記すと思いますが、公式上は唐に占領されていないのです。

唐による占領がなかったとすれば、唐に占領されたかのように記す『日本書紀』は、記事を捏造していることになります。また、他方で唐によって倭が占領されていたとするならば、白村江の戦いの直後、唐人が駐留する中では水城や大野城の築城はできません。

いずれにしても『日本書紀』の水城や大野城の築城に関する記事は信用が置けません。『日本書紀』はなぜこのように記したのでしょうか。それが問題です。

唐が倭の政庁大宰府を占領したとほのめかすことにより、それが原因で倭國が滅亡したことを描きたかったのでしょうか。

いずれにしても、中国史書の記事を信頼すれば、大宰府は占領されていないのですから、文献史学の視点では、大宰府は唐に占領されていないと結論づけるべきでしょう。

（２）年号の視点では

『日本書紀』の記事にあるように、白村江の戦い（663年8月）の9カ月後の664年5月には、唐から郭務悰を代表にして使節団が来訪し大宰府を事実上占領したように記しています。とすると、郭務悰が来訪している同時期の664年に水城を築造していることになり

ます。果たして唐の使節団若しくは占領軍が大宰府に陣取っているのに、これに隠れて大規模な防衛施設の築造工事ができたのでしょうか。私にはちょっと無理があるように思われます。

そして、664年12月にいったん郭務悰らは帰途し、また665年9月に唐の劉徳高、郭務悰が来訪します。同年12月には帰国しています。この665年には、大野城や基肄城が築造されたと『日本書紀』は記します。

郭務悰の2度の来訪中のいずれの時期にも、唐に対する大規模な防衛施設の造成工事が行なわれていたとすれば、郭務悰は占領した相手の国にしながら全く敵国の監視ができないただのボンクラということになります。とても唐の代表者としての役割を果たしているとは思えません。『日本書紀』の水城や大野城の築城記事には無理があるようです。

この時期の古代逸年号は、白鳳年号(661～683年)です。大宰府が占領されたとすれば、それは、歴史の大きな変換点ですが、白鳳の年号が途切れることなく何事もなかったように継続しています。唐との連合軍であった新羅は、唐の傘下にあって一喝され、650年から唐の年号を用いています。この新羅の状況を事例にすると、もし倭が、唐により占領されたならば、当時の唐の年号、麟徳(664年-665年)の使用が義務付けられたことでしょう。しかし、当時、倭が唐の年号を使用した形跡はありません。

したがって、古代逸年号の視点からすれば大宰府は唐の都督府にもならず占領もされていなかったと考えられます。

【重要】会報誌の送付について(再掲)

2019年8月まで会報誌は発行時に毎月送付してきましたが、郵送費削減のため11月号と12月号は12月号発行の際に同封して送付し今後も同様とします。ご迷惑をおかけしますが今後とも会の運営にご理解、ご協力をいただきますようお願い致します。

前回の例会の内容

■ 臼杵石仏の正和四年は九州年号 瀬戸市 林 伸禧

11月に開催の古代史セミナーで発表する内容について説明した。正和四年が九州年号である可能性を示した。

■ 「百嶋神社考古学」からみる古代の伊豫国(第二～五章) 安城市 山田 裕

百嶋由一郎作成の「神々の系図ー平成12年考」から、新たな視点で古代の伊豫国を考察した。

■ このはなさくやひめ その3 名古屋市 石田泉城

木花開耶姫命は通説の乙女と違って熟女とするのが妥当とした。

古田武彦先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡不要、遅刻・早退もかまいません。例会で発表する場合には資料を25部用意ください。

例会の予定

■ 例会の予定

「東海の古代」231号を持参ください。

- 1 日時 12月15日(日)13:30～(第5集会室)
- 2 場所 名古屋市市政資料館
名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051
- 3 参加料 500円 (会員は不要)
- 4 交通機関
(1) 地下鉄名城線「市役所」、東徒歩8分
(2) 名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩5分
(3) 市バス「市政資料館南」、北徒歩5分
(4) 市バス「清水口」、南西徒歩8分
(5) 市バス「市役所」、東徒歩8分
- 5 駐車場 市政資料館:12台+α収容(無料)

■ 来月以降の例会

- | | |
|------------|------------|
| 1月11日(土) | 市政資料館第4集会室 |
| 2月11日(火・祭) | 第5集会室 |
| 3月15日(日) | 第4集会室 |

会員の投稿について

■ 会報誌への投稿(編集担当:石田)

furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp

■ 投稿締切り日 12月25日(水)